

他県の選手に頼らず地元青森県出身の選手たちだけでチームを編成し、甲子園優勝を目指している高校野球部があります。青森県弘前市に学び舎を構える「弘前学院聖愛高等学校」です。

硬式野球部監督を務める原田一範氏は、九年前に倫理法人会に入会以来、経営者モーニングセミナーに通い、倫理法人会の学びを最大限に活かして部員の指導にあたっています。

二〇一三年には、春夏を通じて初の甲子園に出場。それまで高校野球界では無名だった同校を県内屈指の強豪校にまで育て上げました。

同校の魅力であり、もう一つの強みは、挨拶の美しさです。対戦相手へのお辞儀から始まり、試合後には敵味方関係なく応援席にも、全員の声と所作がピタリと一つに揃う挨拶を行ないます。

人間教育をモットーとする氏が掲げる野球部の目的は、「高校野球を通じて、二十一世紀を担い、社会に貢献できる倫理観のある自立した人間になること」です。そして、「その目標が甲子園優勝であり、青森県を元気にすること」と語ります。

ただし監督就任の当初は、自分の名誉のためにという考え方で、なかなかうまくならない部員達にペナルティを課すなど、すべてトップダウンの指導を行なっていたといいます。

猛練習の甲斐あって数年後には、県内ベスト四に、その後、目標としていた強豪高校に勝つことができようになりました。

しかし、あと一步で甲子園出場というところで、その壁を打ち破ることができなかったのです。

ある時、体操の世界で何人も日本一の選手を育てたコーチが、同校に指導に来た際、日本一になるにはどうしたらよいかと直球の質問をしました。



小さな積み重ねが大目標への扉を開く

すると、「毎日、貯金をしなさい」と言います。原田氏が問うと、「だから勝てないんだよ」と一喝されました。

氏が「わかりました。毎日五百円を貯金します」と言うと、やはり先生は「それでは勝てない」と言い放ちます。そして、「毎日やることは大きなこと（金額）である必要はない。続けることが大切なのだ」と語気を強めたのです。

そんな禅問答のようなやり取りの中で、氏はハッとなりました。大きな目標を達成するために、これまでやらなかったことを実行することは大切だ。しかし、身近なことからコツコツと積み重ねることとはもともと大切なのだ」と気づいたのでした。

それから氏は、毎日、十円貯金することを決めました。しかし、最初の三年間は毎日続けることができませんでした。忘れてしまう日があったり、遠征に行くと続けられないときあらめたり、予選大会で負けると、この実践の意味が見い出せなくなるなど、継続ができなかったのです。

ところが、試行錯誤の四年目。貯金のためのチェックリストを作り、貯金箱をいつでもどこでも持参すると、毎日欠かさず貯金することができたのです。この小さな実践は、野球部員にも波及したのでしょうか、その年の全国高校野球選手権青森大会で初優勝し、甲子園出場を決めたのでした。小さな実践を継続したことで、芯を強くした原田氏。この実践を始めた頃に倫理法人会と出会い、入会します。

その後、監督として、どのような実践に取り組むか、考え方やモノの見方が変わってきたのでしょうか。この続きは、『倫理ネットワーク』新年一月号の新春対談で、その一端を語ってくれます。